# 昭和六十一年度　研究所報告

## 一、組　織

一、所　長　　渡辺貞麿

一、主　事　　市橋弘道

一、研究所委員会　北西　弘学長・臼井元成文学部長・花山大成事務局長・堅田　修大学院研究科長・三桐慈海短期大学部長・河内昭円学生部長・岩見　至図書館長・長崎法潤教授・小川一乗教授・藤島建樹教授・鈴木幹雄教授・松村尚子助教授・友田孝興助教授

## 一、昭和六十一年度研究班

### 指定研究〈特定研究〉

◎研究名　　真宗学事研究

研究課題　「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」

代表者　学長　北西　弘

研究員　幡谷　明（チーフ・教授・真宗学）鈴木幹雄（教授・倫理学）大竹　鑑（教授・教育学）大桑　斉（教授・国史学）木場明志（専任講師・国史学）草野顕之（専任講師・日本仏教史学）渡辺貞麿（所長・教授・国文学）市橋弘道（主事・助教授・英語）

嘱託研究員　福島和人（大谷高校教諭）西田真因（大谷専修学院指導）

研究補助員　三本昌之（修士課程修了生・日本仏教史学）深田虎雄（日本仏教史学）片山伸（日本仏教史学）熊木剛（真宗学）（以上博士課程修了生）宮崎健司、綿谷勝信、瓏　弘信（以上博士課程）

## ◎研究名　海外仏教研究

研究課題　「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

代表者　学長　北西　弘

研究員　長崎法潤（チーフ・教授・インド学）岩田慶治（教授・社会学）多田　稔（教授・英文学）箕浦恵了（教授・西洋哲学）安富信哉（専任講師・真宗学）宮下晴輝（専任講師・仏教学）渡辺貞麿（所長・教授・国文学）市橋弘道（主事・助教授・英語）

嘱託研究員　今枝由郎（フランス国立中央科学研究所研究員）大河内了義（神戸大学教授）リノ・ベリーニ（本学非常勤講師）ジャン＝ノエル・ロベール（フランス国立中央科学研究所主任研究員・高等学院講師）彦坂　周（アジア文化研究所長・インド、マドラス）ロバート・ローズ（本学非常勤講師・仏教学）

研究補助員　ウダガマ・スマンガラ（博士課程修了生・仏教学）橋本篤司（博士課程）

## 指定研究〈委託研究〉

◎研究名　西蔵文献研究

研究課題　「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

代表者　学長　北西　弘

研究員　小川一乗（チーフ・教授・仏教学）片野道雄（助教授・仏教学）小谷信千代、白館戒雲（以上専任講師・仏教学）

研究補助員　松田和信（本学非常勤講師・仏教学）

◎研究名　大蔵経学術用語研究

研究課題　「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」

代表者　学長　北西　弘

研究員　神戸和麿（チーフ・教授・真宗学）古田和弘（教授・仏教学）木村宣彰、一色順心（以上専任講師・仏教学）安藤文雄、三明智彰（以上専任講師・真宗学）

研究補助員　井上　円、加来雄之（以上本学非常勤講師・真宗学）兵藤一夫（本学非常勤講師・仏教学）萩原晃俊（博士課程）

## 一般研究〈共同研究〉

◎研究テーマ　「『オックスフォード運動』の意義とその影響について」
代表者　多田　稔教授
研究員　多田　稔（教授・英文学）内藤史朗（教授・英文学）鈴木繁一（助教授・英文学）佐々木正昭（助教授・教育学）村瀬順子（専任講師・英文学）

◎研究テーマ　「東本願寺中国布教史の基礎的研究」
代表者　木場明志専任講師
研究員　木場明志（専任講師・国史学）大桑　斉（教授・国史学）安藤智信（助教授・東洋仏教史学）
嘱託研究員　桂華淳祥（助手・東洋史学）

## 一般研究〈個人研究〉

◎研究テーマ　「チベット語古典文法学の研究」
研究者　小谷信千代（専任講師・仏教学）

◎研究テーマ　「『私』の現象学的究明」
研究者　池上哲司（助教授・倫理学）

◎研究テーマ　「中国中世における政治と宗教」

研究者　大内文雄（専任講師・東洋史学）

## 二、「研究所報」の発刊

### 第十五号


一、大谷大学三百年史を考える……北西　弘
一、昭和六十一年度「指定研究」研究計画紹介
一、昭和六十一年度「一般研究」研究目的紹介
・「オックスフォード運動」の意義とその影響について……多田　稔
・東本願寺中国布教史の基礎的研究……木場明志
・チベット語古典文法学の研究……小谷信千代
・「私」の現象学的究明……池上哲司
・中国中世における政治と宗教……大内文雄
一、昭和六十年度「指定研究」研究経過報告
・真宗学事研究……鈴木幹雄
・海外仏教研究……ロバート・ローズ
・西蔵文献研究……小川一乗
・大蔵経学術用語研究……三明智彰

一、昭和六十年度「一般研究」研究概要
・『教行信証』章節の共通表示化への研究……幡谷　明
・真宗寺院史料の研究……北西　弘
・「オックスフォード運動」の意義とその影響について……多田　稔
・『注維摩経』の研究……木村宣彰
・真下飛泉研究……佐々木正昭
・保育者養成機関における宗教教育の現状と課題……松村尚子

## 第十六号

一、西ドイツの仏教研究―点描―……長崎法潤
一、昭和六十二年度「一般研究」選考結果
一、真宗学事研究・研究会報告
・学寮草創関係資料調査報告……木場明志
・『校本　高倉学寮諸制条類纂』編集記……深田虎雄
一、海外仏教研究・研究会報告
・ジョン・ロス・カーター博士による仏教特別セミナーの開催について……ロバート・ローズ
・San Tendai Godai san ki — Sung China through the Eyes of a Japanese Monk ……Robert Borgen

一、海外仏教研究・作業報告
・海外仏教研究所蔵雑誌目録（一九八六年十月現在）……ロバート・ローズ
本田パトリシア
一、ロンドン・インド省図書館の一室から……松田和信

## 三、「指定研究」の動向

### ◎真宗学事研究

「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」

真宗学事研究は、昭和六十年度より「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」との課題を与えられ、大学史編纂を目指して、近世以降の大谷派学事関係資料の収集・整理等の作業を進めてきた。

本年度も昨年度に引き続き〈資料整備〉〈資料検討会〉〈研究会〉の三分野で、研究・作業を行なう事となった。まず〈資料整備〉に於いて、近世学事資料の収集・整理と並行して、昨年不備が指摘された近代以降の分に就いては、宗内・宗外資料の積極的な収集・整理に努めた事により、克服しつつある。又従来から継続されてきた作業の蓄積は、その幾つかを公表する事が出来た。〈資料検討会〉は、学事研究にとって不可欠の作業である。基礎資料の読解は資料への理解を深めると共に、その資料の価値や、そこから触発される問題が指摘され論議されることにより、資料収

集・整理等の作業上の反省や、学事研究の方法論上の考察を深める事ともなる。今年度に於いては、二回の資料検討会がもたれ、幾つかの示唆に富む報告がなされた。〈研究会〉は、研究員各自がそれぞれの課題に基づく研究発表を行ない、その成果を学事研究に反映させていくことにある。その趣旨の許、昨年度には何回かの研究会がもたれたが、今年度は各研究員の多忙等もあり、実現しなかった。又嘱託研究員二氏の研究報告は、依頼も含めた取り組み体制の遅れもあって実現しなかった。

〈資料整備〉

前年度からの継続作業の経過は次の通りである。

一、『上首寮日記』第一冊（文政六年～天保六年）を、「真宗学事資料叢書」の『上首寮日記Ⅰ』として翻刻出版した。又、「上首寮日記」のカード化は、天保七年～嘉永三年まで終了した。

二、『厳如上人御一代記』（全十一冊のうち松本専成氏により『教化研究』に六冊が翻刻済）の未翻刻分、第五、第八～第十一冊のうち、第十一冊目を除き、翻刻を終了した。『教化研究』に翻刻済の第一～第四冊、第六、第七冊のうち、第一～第四冊は対校を終了した。

三、「真宗学事資料叢書」所収予定の「条規集」では、学寮時代分を、『校本高倉学寮諸制条類纂』素稿本としてまとめ、簡易製本した。

四、『中外日報』から大谷派の学事に関わる記事を採録する作業は、昭和四年～昭和六年五月分まで終了した。

五。解題作成の基礎となる「文献目録」は、『真宗学事研究関係文献目録』（第一版）としてまとめた。

今年度からの新たな作業の経過は次の通りである。

一、近代学事関係条規の集成は、『宗報』に当り、明治四年～明治三四年までの分を収集・整理した。この作業は、今年度『校本高倉学寮諸制条類纂』（素稿本）としてまとめられた近世の条規収集・整理作業を受けて、明治以降の本山学事、大学及び各関連学校の学則の収集・整理を行ったものである。作業は、改変及び僅かな訂正・削除等をも押える意味から、既刊の『達令集』などには依らず、『宗報』に直接当った。諸条規は、大学及び各関連学校の性格を明らかにすると共に、本山の学事行政の内容をも明らかにするものである。又、本山学事、各学校等の内容は、政府の文部行政と深い関わりを持っている。その意味で、この作業はまた、文部行政と宗門学事（学校）との関連をも明らかにして行かなくてはならない。これらのことを踏まえれば、作業は条規の収集・整理に留まらず、宗門学事とその背景、更には政府の文部行政に関する広範な資料等の収集・整理が必要となる。しかし、今年度は当面の作業として、条規の収集・整理作業を行った。更に、当該期の各学校の課業表を収集・整理した。それらの作業は、課業表に示された、各学校の授業内容を明らかにすると共に、学科目と時代思潮との関連をも明らかにするものである。上記の作業に関連して、「学事史年表」（文久一年～明治四五年）第一次作成を終了した。これは、右に述べた、本山学事と文部行政等との関連を明らかにする目的で作成した。

二、学事関係人物資料収集は、曽我・金子問題資料収集の一環として、昭和一年～昭和八年の『真宗』（宗報）にあたり、収集・整理した。この作業は、曽我・金子問題が、宗門の行政上どのように扱われたかを探るものである。しかしその記事は少なく、僅かに事実報告と宗議会での質議応答等を収集するに留まった。

三、大学の学科・講座変遷の跡づけは、大正十二年度～昭和四一年度までの変遷を一覧表として作成した。この作業

は、大学の学科・講座の変遷を跡づけると共に、各学科・講座の名称及び所属の変更をもたらした理由を明らかにして行くための基礎作業である。

資料採訪調査

学寮草創期の資料採訪・歴代三講者関係寺院への調査として、昭和六一年三月二日～五日の間、石川県の常徳寺、往還寺、富山県の開正寺・真敬寺・円満寺の資料採訪調査を行った（木場・草野研究員、綿谷・宮崎研究補助員）。

〈資料検討会〉

資料検討会は、以下の通りである。

一、日　時　昭和六一年九月二五日

発　表　「学寮草創関係資料採訪調査報告」

発表者　木場明志研究員

二、日　時　昭和六一年十月三十一日

発　表　「校本高倉学寮諸制条類纂」編集報告

発表者　深田虎雄研究補助員

（研究員・チーフ　幡谷　明）

## ◎海外仏教研究

### 「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

「海外仏教研究」は昭和五十七年度発足以来、益々さかんになる欧米の仏教学研究の現状を把握し、その研究方法あるいは研究目的等を検討することを主眼としている。具体的には欧米で発表されている著作・論文を収集し、文献目録を作成することが当面の目的である。昭和六十一年度には、過去四年間の実績をふまえて文献資料の収集と検討を継続しつつ、昨年同様、海外における仏教研究に関する方法論に研究テーマを設定し、研究を進めてきた。さらに外国の研究者を講師とした研究会も活発に行われた。

〈研究例会〉

定例の研究会では、研究テーマに即して、海外の著名な研究者を招き、欧米の仏教学の現状や方法論について直接拝聴することができた。

一、四月十六日

Dr. G. M. Bongard-Levin, Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences, USSR

"Buddhist Studies in USSR"

二、六月三日

Dr. Nathmal Tatia, Director, Jain Vishwa Bharati

"Śraddhā and Jñāna"

三、六月五日

Dr. John Keenan, Visiting Research Fellow, Nanzan Institute for Religion and Culture

"Intent and Content of Yogācāra Philosophy"

四、六月二十六日

Dr. David Chappell, University of Hawaii

"Pure Land Sectarianism and Comprehensiveness"

五、七月十八日

Dr. Mokusen Miyuki, University of California, Northridge; Jungian Psychoanalyst

「念仏の世界性」

六、十月十六日

Dr. Yoshiro Imaeda, Centre National de la Recherche Scientifique

「ブータンの仏教事情」

七、十一月四日

Gyomay Kubose, Chicago Buddhist Temple

「現在のアメリカに於ける仏教事情」

八、十一月十三日

Dr. Thomas Kasulis, Northland College

カスーリス先生をかこむ学術懇談会

九、十二月十一日

Dr. Jan Van Bragt, Director, Nanzan Institute for Religion and Culture

「キリスト教から見た真宗」

十、一月十三日

Dr. Robert Borgen, University of Hawaii

「成尋の『参天台五台山記』—青い目に写った日本人の中国観—」

十一、二月十九日

Dr. Carl Jackson, University of Texas, El Paso

"Asian Influence on American Thought"

十二、三月二十五日

Dr. Michael Hahn, University of Bonn

"On the 'paracanonical' translation of Nāgārjuna's Ratnāvalī"

以上のように、今年度は十二回の研究会が開催された。これらの研究会を通して、欧米の学者の研究の一端を直接に聴き、意見交換をすることができた。また文献目録作成のための貴重な情報も多く得ることができた。なおこれら

の研究会は学外の諸大学・研究所の学者及び京都在住の海外留学生の関心を集め、出席者も増えつつある。このような意味で大谷大学と他の大学や研究機関との交流に果している研究会の役割は毎年大きくなっているといえよう。

なお Keenan 博士の発表は "The Intent and Structure of Yogācāra Philosophy: Its Relevance for Modern Religious Thought" と題して『研究所紀要』第四号に掲載され、Borgen 博士の発表要旨は "*San Tendai Godai san ki*" とし『研究所報』第十六号に掲載された。

〈文献目録作成と資料収集について〉

研究会開催と共に本研究の中心的活動のひとつは文献目録の作成である。この文献目録の資料として研究プロジェクト発足当初より欧米諸国の言語で出版されている仏教学の書物や雑誌を積極的に購入してきた。今年度は約三百冊を購入し、海外仏教研究班には現在約千六百冊の本と学術雑誌約五十種類がある。これらの図書はいうまでもなく仏教学関係のものが中心であるが、仏教学と深く関連のある東洋学・宗教学等の図書も多く所蔵されており、仏教の総合的研究が可能となっている。これらの図書は、本来的には文献目録作成のための資料として収集されたものであるが、海外仏教研究班の研究員や大学関係者のみならず、学外の研究者にも利用されている。このような公開された総合的な仏教学関係の図書室が京都には少ないため、京都在住の海外の研究者などが最近多くおとずれるようになっている。この点においても海外仏教研究は大谷大学の国際的交流の窓口として広く貢献している。

文献目録の作成も着々と進められている。図書室が整備されるにしたがい、研究室で直接多くの資料を検討することができるようになった。しかし入手不可能な資料も多くあり、それらを補うために大学図書館、さらには他の大学

の図書館への閲覧調査も実施している。特に京都大学の人文科学研究所へはウダガマ・スマンガラ研究補助員が十数回赴き、資料を閲覧させていただいた。その結果、文献目録に掲載するデータはかなり充実し、具体的な文献目録作成がようやく可能になる兆しが見えてきたといえる。来年度からは十分検討し、テーマごとに文献目録を作成し、徐々に出版してゆきたいと考えている。

（嘱託研究員　ロバート・F・ローズ、浅野玄誠）

## ◎西蔵文献研究

### 「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

一、北京版チベット大蔵経の勘同目録の編纂について

『勘同目録』は、大谷大学図書館所蔵の北京版チベット大蔵経をデルゲ版やナルタン版などの異版と対校し、漢訳、梵文原典のある文献については、その所在を示し、さらに各典籍の題名・章題・著者名・訳者名・校訂者名などの異同を示すとともに、各典籍の奥書を翻訳して研究者の便宜を計ったものである。甘殊爾部（経典部）の目録はすでに戦前に出版されていたが、丹殊爾部（論典部）の目録は昭和四十年に第一分冊（Ⅰ-1）を出版して以来、第六分冊（Ⅰ-6）までが本学図書館より出版され、さらに第七分冊（Ⅱ-1）が当研究所より昭和六十年に出版された。編纂作業は第八分冊の出版に向けて進行中である。第八分冊には経釈部・唯識部・阿毘達磨部が収録される。

二、蔵外文献の研究について

大谷大学図書館は、北京版チベット大蔵経とは別に、蔵外文献を四千点以上も所蔵している。これらの文献は、明治以降日本人として初めてチベット入りを果たした寺本婉雅（一八七二～一九四〇、帰国後本学教授となる）によって北京、青海で蒐集されたものが大部分であるが、それ以外にも、チベット入国の旅の途上、雲南省に消息を断った悲運の大谷派僧、能海寛（一八六八～一九〇一）のもたらしたものが若干あり、さらに近年になってインド、ブータン等より購入、寄贈されたものも徐々に増えている。近年入手されたものを除く蔵外文献に対する目録は昭和四十八年に大谷大学図書館より、さらに目録に対する索引も昭和六十年に当研究所より出版された。これによってコレクションは学界に公開され、研究者共有の財産となったが、さらに研究者の利用の便を考え、我々は六十一年度から蔵外文献中に見出される稀覯本を影印出版するための準備を進めてきた。今では各地の多くの蔵外コレクションが知られているが、本学のコレクションは木版による刊本のみに止まらず多くの写本類を含み、その中には他のコレクションには全く見出されない貴重な文献が数十点もあることが確認されている。その中にはモンゴル人の手になる『大唐西域記』のチベット語訳写本、ダルマキールティの『量決択』に対するサンプ学問寺の学僧ツァンナクパ（十二世紀）の註釈の世界唯一の現存写本などがある。以下は我々が選び出した出版予定文献のリストである（当面予定されているもののみ）。

(1)　No.12459　チベット語訳『大唐西域記』

(2)　No.13971　『量決択』の註釈「善釈集」ツァンナクパ作

(3)　No.13949-13954　中観論書

(4)　No.13955-13956　セラ寺教科書（アビサマヤ関係）

(5) No.13957　セラ寺教科書（『入中論』関係）
(6) No.13972　サキャ派所伝の『倶舎論』註釈書
(7) No.13984,13987　ウパローセルの文法書
(8) No.13983　カラーパの文法書
(9) No.12460　チベット語による中国仏教史
(10) No.13981　サンプ学問寺歴代管長記

（研究員・チーフ　小川　一乗）

## ◎大蔵経学術用語研究

### 「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」

本研究は「浄土教関係典籍における学術用語の総合的研究」という研究課題のもとに、『大正新脩大蔵経』全百巻のうち第八三巻・第八四巻所収の日本撰述浄土教関係典籍（日蓮宗関係典籍を含む）について、正確かつ厳密な解読を通して特に重要な学術用語を選定し、その分類研究を行い、その研究成果を『大正新脩大蔵経索引』第四三巻続諸宗部六として出版することを目的としたものである。昭和五九年度より当研究所の指定研究（委託研究）として継続されてきたのであるが、本年度は上記の索引出版を昭和六一年度末にひかえて、これまでの研究経過をふまえながら、いよいよ出版に向けての最終的な作業を中心に研究を進めてきた。その実際的な作業にあたっては、六名の研究員お

よび四名の研究補助員ばかりではなく、多数の学生諸君の甚大なる助力を得たことである。その結果、当初の計画通り文部省の科学研究費「研究成果公開促進費」を得て出版するに至った。

周知のごとく、『大正新脩大蔵経索引』は『大正新脩大蔵経』の手引きとして、仏教研究は勿論のこと東洋文化全般にわたる研究にとって基本的媒介の役割を果たすものである。そこで仏教系六大学によって大蔵経学術用語研究会が組織され、学術用語の研究を推し進めてきた。

大谷大学では昭和三六年以来、既に七冊の索引の刊行を担当してきている。すなわち『大正新脩大蔵経索引・毘曇部下』（三七年）、『同・宝積部』（四一年）、『同・経集部下』（四四年）、『同・史伝部上』（四八年）、『同・論疏部二』（五二年）、『同・経疏部二』（五六年）、『同・続諸宗部二』（五九年）の七冊である。八冊目にあたる今回の索引は前回と同様に「日本撰述部」の索引である。しかも今回は日本において特に民衆と深い関わりをもちながら、仏教は勿論のこと文化全般にわたって広く影響を与えた浄土教関係の典籍を中心に扱うものであるから、その有用性は期待をはるかに上回るといえるであろう。それだけに研究発足の当初よりいくつかの問題に直面してきたが、その実際の作業手順としては前回までと大差なく推進できたと思われる。『大正新脩大蔵経索引』は言うまでもなく、音次索引（五十音別索引）・分類項目別索引・検字索引（字画索引・四角号碼索引）からなり、これに収録典籍の解題および凡例を付す。その編纂手順は次の通りである。

(1)　索引に付すべき用語の選定（線引き）

(2)　選定された用語のカード化

(3)　用語の三十項目分類

(4) 親字の分類
(5) 親字の読み決定
(6) 五十音配列
(7) 音次索引の原稿化
(8) 分類項目別配列
(9) 分類項目別索引の原稿化
(10) 解題・検字索引等の整備
(11) 出版社へ原稿搬入
(12) 校正作業
(13) 出版

今回の索引編纂について、これらの作業を年度順に追ってみると、昭和五九年度にはその前年度からの準備をふまえて、まず線引きに着手した。その際、真宗学専攻の大学院生の協力をも得た。線引きが完了して点検した後、直ちにカード化の作業となるが、これには特に多くの熱心な学部生のおしみない協力を得たことである。その結果、年度内にほぼカード化を終え、そのカード枚数は実に約十二万枚におよんだ。昭和六十年度に入り、学術用語の分類研究を進めた。『大蔵経』に編入された諸典籍には、いわゆる仏教用語は勿論のこと、天文・地理・動物・植物・鉱物・生理・心理・物理・美術など広汎な分野にわたる学術用語が含まれており、『大正新脩大蔵経索引』はこれらの用語を三十項目に分類するものである。分類に際しては、いずれの項目にも配当し難い用語や、数項目に分類が分かれる

用語もあったので、テキストに一々の用語を照し合わせながら慎重な検討を重ねた。こうして約十二万語の全てに分類を施して後、五十音順に配列すべく親字ごとにカードを並べ変え、その読みを決定する。本索引は呉音読みを原則としているが、今回扱った『大蔵経』には漢文体・和文体の典籍がそれぞれ編入されている。したがって人名・寺院名・地名等の用語の中には呉音で読むべきでないものがきわめて多く含まれているのである。その点、前回の索引でも同様の問題が指摘されていたが、今回は特に和文体という性格から仮名まじりの用語の読みをどのように処理するかが大きな問題となった。そこで、前回通り一応呉音読みに従って配列し、それ以外の読みをすべき場合は固有名詞に限らず一般的な読みにして配列し、呉音からも検索できるようにした。こうして五十音配列が整えられての後、原稿浄写となる。この作業にも多くの学生諸君の手を借りることができ、作業は順調に進んだ。

今年度はまず出揃った原稿を総点検することから始めた。この段階で問題になったことは原稿量が当初の予定をはるかに越えてしまったことである。そこでもう一度最初から用語の一々を検討し直し、調整をはかった。さらにこれまでも問題になってきた分類項目や配列についても入念なチェックを繰り返し行い、ようやく出版社に搬入するに至った。その後は最終的な校正作業を残すばかりとなり、正確かつ有益な索引を世に送るべく細かな漢字と数字との校正に没頭し、年度末までに刊行するに至った。

こうして出来上がった『大正新脩大蔵経索引』第四三巻続諸宗部六は五五九ページにわたるものとなった。この索引の完成によって、『大正新脩大蔵経』第八三巻・第八四巻に収められた八世紀より十八世紀までの主要な日本浄土教典籍に関する研究が今後一層進展することが期待される。そのなかには今日現存しない資料も引用文として数多く含まれている。こうした資料の発掘に索引は欠かせないものである。また日本浄土教といっても源空を開祖とする浄

土宗各派、親鸞を宗祖とする真宗をはじめとして時宗や融通念仏宗、さらには珍海や源信などの南都・叡山の浄土教などきわめて多岐にわたる。これまでの研究においてもこれら相互の関連性が注目されてきたが、この索引を通じて内外の研究者によってより幅の広い見地から日本浄土教の思想が解明されることになろう。

なお本年度は上記の作業と並行して、来年度以降に予定されている「日本撰述倶舎論関係典籍における学術用語の研究」に向けて研究の準備が進められてきた。この研究は『大正新脩大蔵経』第六三巻・第六四巻所収の諸典籍における学術用語の研究を行うものである。

（研究補助員　萩原　晃俊）

# 執筆者紹介

（昭和六十一年度）

研究員　多田　稔……本学教授　英文学
研究員　内藤史朗……本学教授　英文学
研究員　池上哲司……本学助教授　倫理学
研究員　佐々木正昭……本学助教授　教育学
研究員　鈴木繁一……本学助教授　英文学
研究員　大内文雄……本学専任講師　東洋史学
研究員　木場明志……本学専任講師　国史学
研究員　村瀬順子……本学専任講師　英文学
嘱託研究員　桂華淳祥……本学助手　東洋史学
カール・ジャクソン（Carl Jackson）……テキサス大学エル・パソ校教授　歴史学
M・R・サソー（M. R. Saso）……ハワイ大学教授　宗教学

ヴィクター・H・メアー（Victor H. Mair）……ペンシルバニア大学教授　宗教学
Y・カルナダーサ（Y. Karunadasa）……ケラニア大学教授　仏教学